

魅せられて綴る藩文学（十一）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町）

文政元年、師走の暦も余すところ淋しくなった。この冬も朝夕の冷え込みは変わらなかつたが、雪は例年になく少なく、積雪を見たのは二十八日の大雪だけだった。この日、舉家大酒掃。晦日、塾生歳を守るもの七人、益多・宇次郎・無為・屯・甚助・恵海・穎照は、朝食をすませた後、魚町及袋屋へゆき、この一年のお礼とお慶びを申し述べて帰る。三更就寝。

文政二年（一八一九）淡窓三十八歳、益多十九歳の春。

正月 三日 上塚。使益多起文章軌範講。

六日 開左傳講。使益多起戰國策輪講。

二月 十一日 使謙吉復講史記。使無為攝講家求。

使益多開毛詩講。

謙吉（十三歳）史記を講ず。昨年夏頃から三級下に昇進して、史記を中心に講ず。

十三日 與益多赴長善寺會。尋正月十三日艸

堂會也。

釋惠禪為主。既至。同益多。惠禪。

蒲池久市。

登吹上山。散步山上。頃之歸寺後至者。完吾。熊谷昇。佐藤玄猷。二更歸家。

二十四日 病如昨。午後之完吾宅。尋十三日渡

里之會也。

完吾迎會專念寺。會者。益多。熊谷昇。館林清記。佐藤玄猷。山鹿良甫。釋惠禪。而完吾父。寺僧知永。亦陪座。二更歸家。

淡窓は去る十六日より頭痛を病み、昨日は雷雨雹と、今日はまた霰みぞれの降る酷寒の中をおして、渡里わた之會あひだに赴く。

三月 四日 與益多。館林清記。釋慈觀。赴才田

蒲池久市宅。尋前月方山氏之會也。

益多、館林清記・釋慈觀ともに、才田にある蒲池久市宅の詩会に赴く。路は、草場を通り、眠りに覚めた躍動する大地を眺望しながら才田に至る。後、蒲池久市東遊の飲酌をし、因みに詩を賦す。二更に至つて散会し、歸路徳善寺に詣で別れた。

九日 午後與益多。亭。宇三郎散歩。過銀

杏樹下。及淨明寺。至新原。山谷頗佳。新原訪兒玉茂。供茶及酒。移時而去。茂送到友田而歸。過三叉經護院歸家。

十一日 午後與益多。謙吉。頼之。小三郎。

散行遣悶。大原山北。傍坡入山而行。務取生路。到池邊村。上山眺望。東南豁然。比會所宮山背。望者更豁。山行至城内邑東。取路南行。日暮歸家。

病魔とたたかひながら、塾頭を努める淡窓は、門生宅を順番に詩会を開くことに、必ずその周辺を逍遙して、風光を賞して詩作している。同行の門生たちも、習つて

詩作した。また散歩、散行して気鬱を晴らそうと、塾生たちの気分一新にも努めている。若葉に春の陽射しは爽やかであった。

十六日 午後同伯父。如件。詣拜堂觀桜。益多。亭。三七郎。仙太郎。祐翁。虎之助。顯二從焉。…略…

この日拜堂に桜を觀て、会所宮山の北をすぎるとき、山木の間には鶯の囀りを聞き、路をかえて険しい山を切開いて、やつとの思いで山頂に着いた。眼下にみる隈川は、絶景であつた。申時家に歸り、夜樓に登つて月蝕を伺う。光輝き太く澄んでいた。

十八日 午時陪伯父。遊石松村。益多。春育。和市從焉。

十九日 午時赴城内含翠樓（明月樓）會。尋四日才田之會也。三松齋壽為主。會者。益多。館林清記。後藤。齋。兒玉茂。釈昇道。佐藤玄猷。山鹿良輔。諫山安民。釈惠禪。日夕歸家。

二十日 午時與益多。松吉郎。鼎。亨。潤八。

元吉。散步詣本宮及靈泉祠。過刃連

村而歸。所由或生。或熟。與益多聯

句。得五律五首。是日牆西梨花盛開。

散步の歸り道、益多と聯句五律五首を得た。

二十二日 未時上塚。益多。常太郎從焉。既歸。

與益多賦詩於樓上至暮。予得十一首。

益多得十二首。

二十五日 巳時將謁羽野金毘羅祠。益多。謙吉。

頼之。亨。一九郎。宇三郎。從焉。

取路於艸場。…略…未時歸家。

二十六日の月旦に、名を録する者凡八十二人、月旦八
十人に上ることこれより始まる。

二十七日 陪伯父散步。益多。三七郎。一乘。

法岩。顯二。從焉。謁堤祇園祠。更

上有菅祠。北轉而下。上至上馬場天

照大神祠。憩息良久而歸。

二十九日 益多有疾。廢毛詩講。

四月 朔日 午時陪伯父散步。使益多先往告館林

清記。…略…

五日 與益多散步。至千體寺經護院。經村

西北。至下道而歸。

此年の春、淡窓は詩を論じて、小関長卿・中島子玉に
贈ると題して詩を作った。淡窓三十九歳の時の作である。

論詩贈小關長卿・中島子玉

歌詩寫情性。實隨民族移。風雅非一體。古今固多岐。

作家達時變。沿革互有之。苟存敦厚旨。風教可維持。

昔當室町氏。禮樂屬禪經。江都開昭運。數公建堂基。

氣初除蔬笋。舌漸滌侏儻。猶是螺蛤味。難比宗廟犧。

正享多大家。森森列鼓旗。優遊兩漢域。出入三唐籬。

格調務寡傲。性靈却蔽虧。里贖自謂美。本非傾國姿。

天明又一變。趙宋奉爲師。風塵拂陳語。花草抽新思。

雖裁教辟志。轉習淫哇辭。楚齊交失矣。誰識鳥雄雌。

寄言關及島。更張良在茲。雞口興牛後。趨舍君自知。

我亦丈夫也。李杜彼爲誰。誰明六義要。以起一時衰。

淡窓五十九歳になつても、詩を論ずるの詩はこの詩論

であることを「淡窓詩話」に曰っている。

「一家の説を唱えて当世の弊風を矯めんとするの意あり。関・島二子にも其旨を諭せり。故に一時の衰えを起する言あり。今は其念断えてなし。夫れ詩は人々の志を言うものなり。……予は只予が好む所に従うのみ、広く世人を誘うて、予が説に従わしむるの意なし。もし人予が好む所と同じき者あらば、予に従うも可なり。もし好む所同じからざれば、門人とても強て同じうすべからず。……予が好む所は、性情を主として、格調廢せず。二つのものの中をとるなり。予は唐を主として、宋明を兼用す。是れ予が好む所なり。然れども天下に広く流行する説は、その説必ず浅近にして一遍なり。かくの如くならざれば、中下等の人を引入るること能わず。予が如き漠然たる説は、とても人の耳に入らず。是また子莫が中をとりて権なきの類なるべしと一笑うして止みぬ。」と。

近世の詩家の変遷についてみると、第三期宗詩時代にあたり、淡窓のこの詩は近世の代表作品とされといえる。

四月 九日 會艸堂。尋三月十九日含翠樓之會也。

會者。益多。館林清記。後齋。熊谷昇。三松齋壽。佐藤玄猷。而尾人松元餘三郎偶客隅町。

十三日 研介入塾。於是書生居塾者。凡三十人。

研介とは岡研介のこと、昨日(十二日)入門、周防岩国の醫生である。坪井一助を以て介を為す。塾に寝起をともにする書生凡三十人。

二十四日 會艸堂。尋九日之會成。會者。釋惠禪。益多。熊谷昇。入夜而散。

閏月 六日 佐伯侯臣。田原新藏來訪。本稱山本猷太。予南遊時。與同筆硯。別二十五年。話舊悵然。飲酌入夜而歸。使益多往館且謝焉。

田原新藏本名は山本猷太、淡窓が寛政七年(十四歳)、師松下西洋を慕って佐伯藩に遊学した時筆硯を同じくした。一別二十五年の再会であった。この度国命を奉て來訪、懷旧悵然飲酌夜に入つて別れ、益多同行して謝す。

五月二十九日 艸堂小集。尋閏月二十四日、館林清

三月の始め、東都に遊んだ蒲池久市、数日前帰り、

記宅之會也。會者。釋慈觀。益多。

二ヶ月ぶりの詩會を開いた。

松本主計。釋惠禪。館林清記。三松

齋壽。夜二更而散。

六月 五日 使益多講四家雋中李王文。

二十日淡窓二十八歳のとき、諸子十一名を品している。その筆頭に子玉を品して次のようにいつている。

六日 會艸堂。迎蒲池久市歸國而觴之。且

「中子玉、才機英發、風度洒落、自我降帷教授、未嘗見才如此者。蓋劉毅堂頼山陽輩人也。使之專力於學。

尋五月晦日。水明亭會也。會者。益多。兒玉茂。三松齋壽。釋惠禪。入夜而散。

則成名於海内矣。若捨文學。而任吏務。則佐伯城中一士人耳。子玉其可不知所擇哉。」(以下略)

十五日 放學。午後同伯父。益多。之魚町拜神輿。是歲祭事如舊。而以不見山車。寂寞如常日耳。晚飯而歸。

二十三日 益多所講毛詩卒業。使開辨道講。鼎

二十四日 午時會佐藤玄猷新居。尋六日艸堂之會也。會者。其順。益多。館林清記。

所講論語卒業。使開孝經講。

「益多講ずる所の毛詩卒業して、辨道講開く。鼎講ずる所の論語卒業し、孝經講を開きしむ。」

蒲池久市。熊谷昇。兒玉茂。釋惠禪。而山鹿良輔亦陪焉。入夜而歸。

晦日 會水明亭。尋九日艸堂之會也。熊谷

(三) 益多西遊

昇爲主。會者。益多。後藤熙齋。館林清記。兒玉茂。釋惠禪。蒲池久市。日暮歸家。

七月 五日 益多之筑前。謁龜井先生。送到石橋。内外書生送者殆三十人。餞於萩尾。頼之。一溪。濁至祝原。是日休諸講。

廢四家傳講。

淡窓は曰う「小成の後は筑に至りて、先生の門に入らしむること、これ素顔なり。(略)諫山安民。

小關亨。麻生伊織が輩、皆會て筑に遊べり。

今益多は我門の第一流なり。是を師家に進めずんば有るべからず。故に之を勧めて西遊せしめたり。」

文政二年(一八一九)益多十九歳、七月五日内外の書生三十人の送別を受け、日田を出発し、筑前の亀井塾に入門した。亀井塾は、かつて淡窓が十六歳の時から十八歳になるまで遊学した名門塾であつて、淡窓病弱のため十八歳で辞して帰郷し、塾を開設して以来、門下の秀才を我が師家に学ばせ、己より以上の研学をさずけることを情義としていた。

よつて、既に諫山安民・小関亨・麻生伊織を遊ばせ、今咸宜第一の高弟中島益多を遊学させたのである。

では、ここで亀井塾について述べることにする。この亀井塾については淡窓全書に克明に記されているが、他の文献によつて述べることにする。

亀井塾は、亀井昭陽時代になつて、隆盛を極めたと

いつても過言ではない。

亀井昭陽は、父亀井南溟の長子として、安永二年(一七七三)八月十一日、福岡唐人町に生れた。幼より才名あり、十三歳の時父に従い秋月侯に謁し、十五歳には既に文名があつた。

父教を奉じ、力を經史百家に致し、寛政三年(一七九一)十九歳の時徳山に遊び、藩儒役藍泉に学び、五月にして帰り、「成国治要」三巻を著す。

当時、古賀小太郎(侗庵)・頼久太郎(山陽)・亀井昱太郎(昭陽)を三太郎と称し、海内第一の才子といわれた人である。

文政元年(一八一八)山陽が西遊した時、博多に入るや昭陽を訪い、詩酒徵逐、議論を上下すること一再にとどまらなかつたという。

四月二十六日、山陽は博多に亀井昭陽を訪うた。両家は久しき以前より、親交があるゆえである。則ち、山陽の父春水と、昭陽の父南溟とは、山陽が未だ生れない時からの友人であり、春水が大阪に在った頃、南溟も笈を負つて京撰の間にあつて、交わりを結ん

だ。爾來、南溟は東遊の途次必ず春水を訪れていた
ので、夙に春水が子に山陽あるを知っていた。殊に
山陽が十八九歳の時に作した蒙古來の詩を示された
時、これを一読、激賞して之を壁に貼り、酒酣なる
毎に朗吟して、快哉を稱えたということを知っていた。
たので、山陽は甚しく其の知己を感じていた。其後、
南溟の門に在る広島の山口鳴鶴より、南溟の事を語
るに至り、益々傾倒し眷々の情があり、相見ゆるや
頻りに西望して、南溟を慕うに至った。この縁故に
して、夙に南溟の子に昭陽あるを知りながら、昭陽
と山陽とは未だ相会う機会はなかつた。文化四年の
初め、昭陽は江戸よりの帰途、広島を過り頼家を訪
れ、山陽父子に相見えて、茲に兩個の交情は愈々深
くなる端緒を開き、爾來互いに書簡の往復をなすに
至り、以來十二年目の会見であつた。

山陽を、西遊に駆り立てる動機の一つを見ることか
ざる。
山陽が西遊した文政元年、時に、亀井昭陽四十五歳、
頼山陽三十九歳、広瀬淡窓三十七歳、昭陽と山陽とは親
の代から子の代へと、その交わりは益々深かつた。また、

昭陽と淡窓とは師弟の間柄からも、猶深く交わっている。
今ここに、山陽と淡窓との交わりも深く結ばれ、この三
儒家の弟子たちが、交互にその門をたたき、学問に勤し
む姿を見ることが出来る。

福岡藩には、修猷館と甘棠館の藩校があつた。藩校に
入れない一般民衆の為に、寺子屋・私塾があつた。この
私塾の中、最も特色あるのは亀井塾であつた。

元來亀井塾には遠遊する者が多く、豊後からは、日田
の広瀬淡窓・旭莊・毛利空桑、後に広瀬淡窓の弟子たち
が学んだ。

この外私塾の中には、かつて淡窓の門下であつた恒遠
醒窓の恒遠塾、重富繩山の嚶鳴館、倉富篤堂の修好堂が
ある。これら何れも淡窓に学んだため、学則の中、殊に
採用進級については咸宜園の風が見られる。

さて、海西の名門私塾、亀井塾に学ぶ中島益多が文政
三年二月八日、約八月の遊学を終えるまで、その学才ぶ
りは如何にあつたか、それは益多が帰る一週間前、亀井
昭陽より淡窓に宛てた、二月一日の書簡の中に見ること
ができる。

最もこの書簡は、淡窓が此年（文政三年）正月、御用

人格に拔擢せられたお祝いの書状に附書して、益多の事を認めたものであるが、「子玉鋭甚、善書も成巻侯。」とあり、益多の才学は亀井塾に識られるところとなった。また、「謁龜昭陽。昭陽亦奇其才。贈以古詩。此之令尹子玉。有背鄙氣象不可當之句。」と、林外は中島子玉傳に認めているところをみても、益多の学才ぶりがわかる。

なお、この昭陽が子玉に贈ったと思われる詩一篇が、平成元年六月一日、子玉の子孫にあたる別府市在住中島ナヲさん（七三）から、寄贈された遺品三十点余りの中にあるという。（未見）

十四日 放學

十五日 放學

九月五日、在塾生三十七人に及んだと、十年前桂林園時代には三十一人に及んだが、その後多い時でも二十五六人に過ぎず、此に至って、始めて十年の舊に復し、その数を添えた懐旧している。

宜園の特徴の一つに入退塾の自由があつて、隨時入門、大帰ができた。入門生の覚悟ひとつ自学実力、即ち、自

分との闘いであつただけに、在塾生の変動は大きかつた。文政二年も暮れんとする冬、頼山陽は昨年冬西遊して、広瀬淡窓を訪ねた時の詩も、『詩鈔』には「訪廣瀬廉卿」と題しただけであつたが、その初稿には、次のようであつた。

「戊寅之冬。遊南豊。訪廣瀬廉卿詞兄。賦此擬贈。匆遽未果。今茲冬。因便録寄。細字解之者。獨

有廉卿。因憶中島生無恙否。願相示。一咲也。」と、山陽の詩には、後日を以て完成された作品の多くを、その著書に見ることが出来る。此の作品も、一年後の同じ時に思いを馳せて、完成された詩であろう。

なお、此の初稿に認めてあるように、中島子玉の安否を心配されていたことは、「西遊に三絶あり、人に中島子玉を得たり」と、言ったことを裏付けるものであると、察するのである。また「一咲也。」とは、山陽らしい表現である。

文政二己卯の年も暮、明けて文政三年春二月八日、益多筑前より帰る。淡窓の信念に違ふことなく、十分な研学をなし、亀井塾の宝物を胸中に重く持ち帰つたであらう。

益多、亀井塾での生活は、自己の若き情熱の日々として、師弟愛の崇高さ、実学の重要さへの覚醒、塾生達との切磋琢磨の日常、また塾の教育方針等々学び、八ヶ月の遊学から帰り、再び塾に留まつて都講の事に務めた。

二月 十一日 伯父招益多供午飯。予亦往焉。午後

與益多。合谷義策。散步到水町。途中聯句。既歸小欽於樓上。佐藤玄猷亦會至。移時而散。

十二日 使益多講檀弓。

益多檀弓（「札記」〔五經の一〕の編名）を講ず。この日新入門生二人、塾舎に在塾する者凡そ三十二人となり、二十三日に至つて凡そ四十人となる。

十六日 初兒玉茂以作婚告。是日使益多往賀。

十七日 之長善寺。應玄海招。尋正月新原之

會也。會者。釋惠禪。兒玉茂。蒲池

久市。館林清記。益多。日暮同益多登吹上山。入夜而歸。

三月 十六日 携益多。一九郎。赴蒲池久市宅。尋

二月長善寺之會也。

四月 四日 府君有命。使悉率内外生徒到府。凡

七十一人。

賜茶及餅。既畢而拜謁。賦詩以呈者十六人。日暮歸家。賜酒肴於塾。

府君の命により、塾生悉く率いて府に行く。益多外凡そ七十人。

門生を、一見しておきたいとの命により、淡窓は門生凡そ七十一人を率いて、明府に赴いた。礼謁を終つて茶及餅を賜り、歸つて後、又酒肴を塾に賜つた。書生、席上に於て詩を賦して進呈した者、十六人である。

五日 府君有命。使以昨所賦詩。寫爲一幅

進呈。既畢。皆到府謝。与謁府君而

歸。

明府命あり、改め書して一幅となし、差出すべしとのことである。

よつて、十八人の詩（追加者二人。他の五十三人姓名書）を合わせ一幅とし、書生官府に往き、明府に謁見して歸つた。この時より、明府を謁見する事が始まつた。

十五日 午後助作父齋鮓及酒至。請嚴君伯母

同食。既而招益多。一溪飲。至暮而

散。

二十二日 雨且有恙。以西塾隘狹。借秋風菴樓

移書生十二人。使益多起尚書講。

二十三日 俊良去塾悉寓於官府。以府君命也。

益多。頼之之彦山。

書生俊良、明府の命により官府に寓、この日益多と頼之は彦山に登り、二十九日塾に帰った。二泊三日の彦山登山、標高一二〇〇メートルの山、山伏の修験道場の四山に屈指する英彦山に宿した。このとき益多は二詩を賦した。淡窓の彦山の詩と共に、双壁といわれている二十歳の詩は、

宿彦山

夢破山村夜未央

殘燈明滅隔隣牆

法螺吹落中峰月

雲冷三千八百房

彦山上宮

鐵鎖攀來踏絕嶺

肥雲豐樹眼將穿

孤鴻飛尽青天外

認得阿蘇一点煙

また、子玉の彦山紀行を読んで、淡窓は次の詩を賦して贈っている。

讀子玉彦山紀行。賦贈

石楠花發映幽叢。春晚崑巒雪始融。

唯覺雷霆鳴地底。寧知杖屨往天中。

羽衣朝會三千客。絳闕晴開南北宮。

君自詩才凌謝朓。不須搔首問蒼穹。

彦山は、英彦山が正確な呼称であり、英彦山神社に由来する。加賀の白山、大和の大峰山、出羽の羽黒山と並んで、山伏の修験道場として知られている神山で、福岡県と大分県に境を接し、標高一二〇〇メートルの山である。

(以下次号へ)